



平成18年度  
進路講演会

◆第3回進路講演会 全学年・職員・保護者対象(3年生は希望者)

1. 日時 平成19年3月15日(木) 14:30～16:10
2. 講師 和田秀樹氏(精神科医) [※和田秀樹氏公式サイト](#)
3. 演題 「21世紀を勝ち抜く知性と生き方を身につける」
4. 講師紹介



1960年生まれ。精神科医。東京大学医学部卒。日本初の心理学ビジネスのシンクタンク、ヒデキ・ワダ・インスティテュートを設立し、代表に就任。国際医療福祉大学教授。一橋大学経済学部非常勤講師。老年精神医学、精神分析学、集団精神療法学が専門。

著書は『学力崩壊』、『大人のための勉強法』、『受験は要領』など多数。心理学、教育問題、老人問題、人材開発、大学受験などのフィールドを中心にテレビ、ラジオ、雑誌や数多くの単行本を執筆し、精力的に活動している。

5. 講演要旨

テレビやラジオで活躍中の精神科医和田秀樹氏を迎えての講演会が、雨が降る肌寒い中、本校第一体育館で行われた。前半は、情報化社会が進行し、知識が簡単に手にはいるようになった現在は「知識社会」になっており、成功者とそうでない者の格差が拡大しているということを様々な資料を使い説明された。その社会で、成功するための「頭の良さ」とは、何なのか。それは知識を豊富に持ち、その知識を基に推論(知識を素に、加工応用ができる能力)ができ、人間的にはメタ認知(自分を正しく知り、自分を変える)ができることだそうである。それは生徒にとっては、模擬試験で自分の弱点を知り、その克服に向けて色々な勉強法を試していきながら、どんどん成績を向上させることに結びつく、という具体的な例も話され、とても分かりやすかったようだ。後半は、より直接的に「要領よく志望校に合格する」ための、「勉強法の見直し」について、さらに「数学の勉強の仕方」・「英語の勉強の仕方」などの話があり、生徒にとってはまさに特効薬的な内容が盛り沢山であった。また、有名難関大学入試の選択科目で、「数学受験者は年収が多い」という話題など生徒を惹き付けるデータがスライドで映され、いつもにも増して注意深く聞き入っている生徒の姿が印象的であった。

◆第2回進路講演会 全学年・職員・保護者対象



1. 日時 平成18年9月29日(金)
2. 講師 田部井淳子氏(登山家)
3. 演題 「世界の山々をめざして」
4. 講演要旨

1975年に、世界最高峰エヴェレスト山に、女性で初めて登頂された田部井淳子氏により90分の講演が行われた。まずは、登山の前段階として、南極大陸最高峰のヴィンソンマッシーフ山やエヴェレスト山に登るまでの準備段階の苦労をていねいに説明された。山に登るための様々な困難や苦境に遭っても、強い意志と周到な準備で自分の夢を実現していったお話は、生徒にとって夢を実現させる強い意志を持つことの重要性を教えてもらった。また南極で体験された、雪の結晶に白夜の光が当たり、ダイヤモンドの上を歩いているようだった、という言葉には、光景が目の前に浮かぶようであった。

一方で、登山チームの荷物を軽量化するための工夫や登頂した時の(排泄物も含む)ゴミを持ち帰る環境への心掛けなどは、登山家としてのマナーを大切にする姿勢のすばらしさを感じることができた。

最後に1980年にチベットで、ベースキャンプから一人山を登っていた時に見た雪男?の話は、生徒や職員を更に惹き付けるに十分な話題であった。

#### 5. [田部井淳子氏ホームページ](#)

### ◆第1回進路講演会 全学年・職員・保護者対象



講演で話された2002ワールドカップ決勝会場となった横浜スタジアムのピッチの芝

玉高に贈られた色紙(サインが鏡文字になっています)

(芝生部分40mm×26mm)

1. 日時 平成18年6月27日(火)
2. 講師 西田善夫氏(元NHKアナウンサー、解説委員、スポーツアナリスト)
3. 演題 「スポーツの名場面、名勝負から何を学んだか」
4. 講師プロフィール

1936年東京生まれ。早稲田大学卒業後、NHK入局。プロ野球・甲子園の実況や情報番組のキャスターとして知られた。五輪放送は夏冬合わせて10回の実況と2回の解説・キャスターを担当。甲子園の高校野球の実況

放送では、監督の人間性・性格を的確につかみ、試合運びと選手の起用法を読みながら展開する放送は、聴く人に興味を抱かせる。また、98年から02年9月まで横浜国際競技場長を勤める。

---

## 5. 講演要旨

様々なスポーツ選手を引き合いに出して、様々な視点からのお話をしていただいた。金栗四三が玉名高校在学中に全国駅伝大会で優勝した時の思い出も語られた。トリノオリンピックで優勝した荒川静香選手の金メダルの価値はなぜ重い？ 女子フィギュアスケートでは、連覇をすることが難しいからであるという。WBCのC (classic)の意味は？ 「第1回目なのに」と疑問に思った西田氏はご自身で調べあげ、classicには伝統という意味があり、これから「伝統」を作っていくからつけられた名前だという話を紹介された。疑問に思ったことはすぐに解決し、自分のものにしていくという「プロ」の姿勢が垣間見られるエピソードであった。

2001年サッカーのコンフェデレーションズ・カップの準決勝戦を、横浜国際競技場の場長であった立場から振り返られた。「良い試合を見なければ、良い芝生を作ろう」ということで、グランドキーパーの職員の方に、良い芝生を作るようお願いした所、「満足のいく芝生を作るために、満足のいく時間を下さい」と言われたという。何事も、良い物を作るには、用意周到な準備が必要であるという話をしていただいた。その準決勝では、雨にもかかわらず芝生の出来が良かったために、中田英寿選手から「他の選手は雨で見えなかったが、ボールはちゃんとバウンドしていた」という最大級の褒め言葉をもったということや、「ベストピッチ賞」を受賞することができたという話をされた。

次に、高校野球の甲子園常連監督であった木内監督の魅力あふれる談話を紹介された。西田氏は木内監督を最高のスポーツ指導者として一目置いており、試合後の監督の「分析力」や、選手が最大限の力を発揮出来るように「平常心」を取り戻させる「会話術」にスポットを当て紹介して下さった。「木内マジック」とは、平凡な選手をうまく起用して優勝にまで導くことに由来している。その神髄はと取材した際に、「やはり会話なのです」と答えられたという。もちろん監督たる者、話術に長けていることにこしたことはないのだが、西田氏の分析は、「聴く人間が話をどう捉えるか」が問題であるということだった。「監督が何を目標しているか」をくみ取ることが出来る生徒たちが優勝できる力をもつのだという。そして、如何に選手達の心理を把握し、選手達の気持ちを前向きに作っていくことができるかが問題であるという。スポーツ指導者にだけ当てはまるのではなく、人材を育てる仕事に就くには必要不可欠な技術であると言える。

元NHKのアナウンサーの肩書き通り、人を引きつける話し方で、聴く者の脳裏に臨場感あふれる場面を想像させていた。時には笑いを巻き起こし、ほのぼのとした雰囲気でも講演を進められ、宣言通り16:00ちょうどに話を終えられあつと言う間の1時間半であった。プロの「技術」を見せて頂き、生徒たちも感心していたようであった。

---

## 6. 生徒の感想から

■今日の講演は、“スポーツ”というものを別な見方で考えることのできた初めての時間でした。スポーツは勝敗が分かれてしまうもの、だからこそ勝ったときの嬉しさや感動は素敵なものです。でも“負けてしまった”コトを自分の中で、成長の中でどう取り入れていくかが一番大事なことなんです。“負け”をそのままにしておけばいつまでたっても“負け”のままですが、自分でもう一度見直すことで“負け”を“勝ち”にもっていくことが大切だと思いました。

■玉高のことも知っておられて、事前に調べてこられたんだろうなと感心しました。自分の高校のことを言われるとやっぱりうれしいし、それも考えてのことだろうなと思い、素晴らしいなと感心しました。

■アナウンサーということでとてもすてきな声でした。一番印象に残っているのは、甲子園決勝前の監督と選手とのやりとりの場面です。監督の何気ない一言で選手たちを平常心で試合に向かわせ、見事優勝した話を聞いて、自分の言葉で相手がどのような気持ちになるか考えることは、コミュニケーションをとるなかでとても大切なことなんだと改めて思いました。

■甲子園での野球の解説が中心だったけど、野球のことをよく知らない私でもまるでその時の試合を見ているような気持ちになりました。その試合の内容をよく覚えておられて、すごいなあと思いました。

■部活をやっていた私にはすごく興味のあるものでした。試合の前は誰だって緊張して、平常心で臨めるものではありません。その時の監督の言葉でどれだけ選手の気持ちが変わるかは私もよくわかります。スポーツには会話が大事というのは本当だと思いました。また、選手の方も監督の言葉をどう受け止めるかも大事なことです。スポーツの喜びや楽しさを改めて気づかされました。